

## 中国における日本関係図書について

著者	王 宝平
雑誌名	中国に伝存の日本関係典籍と文化財
巻	17
ページ	289-298
発行年	2002-03-29
その他のタイトル	Chugoku ni okeru nihon kankei tosho ni tsuite
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00003010">http://doi.org/10.15055/00003010</a>

# 中国における日本関係図書について

王 宝 平

浙江大学日本文化研究所

## はじめに

「中国における日本関係図書について」という題で発表するが、実はここにいう「日本関係図書」は非常に曖昧な概念で、日本人が日本語と漢文で著わした本はもちろん含まれているが、日本で翻刻された中国人が撰した漢籍、いわゆる和刻本漢籍もその中に入っている。そのうち、和刻本漢籍の「国籍」については微妙な問題で、作者が中国人で、内容もおおよそ中国の文化を著述したものなるが故に、日本では中国の書物だと見なされているのは普通のようなものである。たとえば、明治以前の書物を幅広く収録した日本全国の古典総合目録『国書総目録』では、和刻本漢籍は除外されている。日本の「国書」ではないからだろう。一方、中国ではどうなっているだろうか。これは日本式の訓点記号が施され、日本で刊行された本のため、東洋本（日本の本）だと判断されている。そこで、中国各地の図書館で上梓した種々の古籍蔵書目録に、和刻本漢籍の席が剥奪されたのはごく「自然」な選択とされ、日本の『国書総目録』と類似したような性質を備える『中国古籍善本書目』に、それがいっさい排除されたのは有力な証拠であろう。また、出版地によりこれを日本語図書に入れた図書館もあれば、使用言語（漢文）により漢籍部類に伍させた図書館もけっして少数ではない。このようにどっちつかずの和刻本漢籍は、長い間「村八分」とされ、「死蔵」した状態が続いていたのである。

ところが、中国では改革開放政策が実施されて以来、とくにここ10年間に人々の意識に大きな変化が見られた。1991年に浙江大学日本文化研究所（当時の杭州大学日本文化研究中心）主催の「漢籍と中日文化交流」という国際シンポジウムが開かれ、会議の副産物として中国図書館蔵日本関係の古籍目録を作ろうという話がまとまった。このプロジェクトは国際交流基金の助成を得て、翌1992年からスタートし、大陸にある64の省・市立図書館・大学の図書館の協力のもとで順風に帆をあげた。そして、その成果として1995年と1997年に杭州大学出版社よりそれぞれ『中国館蔵和刻本漢籍書目』と『中国館蔵日人漢文書目』が世に生まれた。

このような気運の中で、一部の協力者はさらに各自の図書館所蔵の日本関係図書の調査に乗り出し、それは『北京大学図書館日本版古籍書目』（李玉編、北京大学出版社、1995年）、『天津図書館蔵旧版日文書目』（天津図書館編、4冊、天津社会科学出版社、1996年）、『天津図書館蔵日本刻漢籍書目』（同）、『天津日本図書館館史資料彙編』（同、2冊）などに結

実した。そして、中国でいま進行している未曾有な古籍編集事業—『統修四庫全書』や『中国古籍総目』に、いままで日本の書物だと顧みもしなかった和刻本漢籍も一部採用される方針に一転したという。経済の発展や対外交流の度合いが増すにつれて、一国一城のような従来の視点から、漢字文化圏というより広い視野で東アジア間に展開されていた書物の交流史を見直す動きがあったように感じる。

拙論は上記のプロジェクト担当時から思索してきたことをまとめたもので、主に中国歴史文献に現われた日本書籍に関する記録を通して、中国史上における日本書籍に対する認識の変遷を点描したい。文中にいう「日本書籍」は和書（日本人が日本語および漢文で著述した本）を指すの多いが、便宜上、和刻本漢籍を含めた場合もあることをあらかじめ断っておく。

### 一、日本書籍の記載

中国は世界一古い日本研究の歴史を有し、『魏志・倭人伝』以下歴代の文献に日本関連の記録が山ほどのぼっている。これらの記録のうち、日本の地理、風俗、政治、対外交渉といった内容に偏る傾向が著しくて、書籍に関する記載がきわめて貧弱なのは周知の事実である。『楊文公談苑』『宋史・日本伝』は早くこの遺憾を補填した資料として知られているが、より系統的に日本の書籍を取り扱ったのは明代にできた『日本一鑑』以来のことであろう。著者鄭舜功<sup>ていしゆんこう</sup>は、嘉慶三十四年（1555）に浙江総督楊宜の指示を受けて倭寇対抗策を講じるべく、日本側との交渉に九州へわたった。半年滞在して帰国後に著わしたのはこの日本研究専門書である。彼は本書に初めて「書籍」という項目を設けて、まともに日本の書籍を論じている。日本側が中国に仏教、医学、天文、音楽、占い、絵画などといった分野の本を求めた歴史を略述した後、『史記』『十九史略』『翰墨大全』『太平御覽』『医学大全』など43点の日本所蔵の漢籍を掲げた。そして最後に、『行基図』『職員録』『御成敗式目』『下学集』『聚文略図』『玉函秘訣』『源氏拾遺』『源氏後拾遺』といった類の和書（地図）30点を掲げている。書名の記載に誤記も目立つものであるが、従来の漢籍本位から生粋の和書までに注意をはらったのは、本書の特色をなしている。とくに『万葉集』『金葉集』といったような日本文学作品の中国への紹介は、この著書が濫觴で注目に値する。『日本一鑑』は明代の日本研究書の白眉として今でも読まれている。

降って清に入ると、倭寇問題の解決に伴い、日本研究ブームは下火になった。この時代の日本研究の代表作はなんといっても『吾妻鏡補』を推すべきであろう。故郷呉江市平望の塾の先生を業にした翁広平<sup>おうこうへい</sup>（1760～1812）は、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』の不備を痛感し、浙江省乍浦という対日貿易港の近くに住み、多くの日本の書籍を入手できる利便を生かし、『吾妻鏡』『海東諸国記』『年号箋』『年代掣要』などを参考に、本書を著わした。7年の歳月をかけて稿を改めたこと5回に亘って、嘉慶十九年（1814）にできたこの本は、写本として28巻本と30巻本が世に存し、まさに総合的に日本の天皇系譜、地理、食貨、通商条規、職官、芸文、国語、兵事などを研究した労作である。<sup>(注1)</sup> 本書の冒頭に引用書目が掲げられ、153点

の漢籍（朝鮮人の著書もすこし混じる）のほか、37点におよぶ日本の書籍も列記されている。それは『七経孟子考文補遺』『辨名』『論語古義』といった日本人が書いた経学関係の本もあれば、『日本風土記』『神皇正統記』『続日本紀』『宏仁式』『秘府略』『吾妻鏡』『令義解』『三代実録』といった歴史書もある。さらに『南遊なんゆうこんさいろく稗載録』『蓬蒿詩集』『柳湾漁唱集』『競秀亭草稿』『戊亥遊囊じゅうつがいゆうなん』のような詩文集も引用されている。また、著者は『吾妻鏡補』の巻25「芸文志」において、日本伝存の中国の逸書も含めた105点の図書について書誌解題を行っている。そのうち、『太平記』『古語拾遺』『元亨釈書』『本朝通鑑』『古梅園墨譜』『大墨鴻壺集』などは中国文献に初登場し、『日本受領之事』『日本小志』『僊台国紀略』は今日の日本においても所在不明となっている。

『日本一鑑』は時代の制限を受けて日本の図書を記録するのが中心だとすれば、翁はさらに前進させてそれを日本研究に十分生かしたところに注目すべきであろう。

## 二、日本書籍の中国への流入

中国の図書館所蔵の日本書籍は多数に及んでいるが、和刻本漢籍だけでも3千点くらい有している。そのうち、寛永以前の古活字本は140点くらいあり、日本の古い写本も少数ではない。たとえば、上海図書館架蔵の『文殊師問菩提論經もんじゅしもんぼだいろんきょう』は天平十一年（739）、つまり唐の時代にあたる写経で、後ろに黎庶昌など清末の著名な学者らが記した跋文があつてとても貴重である。そのほか、江戸時代の有名な思想家荻生徂徠、明治前期の書誌学者、医者である森立之、大正・昭和時代の学者内藤湖南、清末・民国時代の学者楊守敬、黎庶昌、羅振玉、王国維おうこくゐなどの題跋のある本も我々の利用開発を待ちかまえているようである。

では、これらの本はいつ、どういうルートを経由して中国に流入したか、私たちは自然にこの問いを發するであろう。実はこれはきわめてやっかいな課題である。日本図書館所蔵の漢籍の源流がだいぶ解明されたのは、長崎貿易に関する豊富な資料や各文庫の古い目録が多く保存されているおかげであろう。日本図書の中国への輸入について考察する場合、これらの利点に恵まれないため、とりあえずアウトラインを描くより仕方がないように思われる。

清朝、そして清以前の公私蔵書目録に、日本の書籍を鶴の目鷹の目で捜査してもあまり見つかからない事実気づくであろう。このように中国所蔵の日本図書の大半は明治以降に伝わったと判断できる。それはおおよそ以下のルートが考えられる。

まず、清末以降の蔵書家の収集が挙げられよう。黎庶昌の『古逸叢書』、楊守敬の『日本訪書志もんかいだい』、孫楷第の『日本東京所見小説書目とうこう』、董康の『書舶庸譚』のことは熟知されているが、李盛鐸りせいたく（1859～1934）も注目に値する人物である。彼は20歳の頃上海で岸田吟香という日本人に出会い、吟香から日本の古籍を購入した。李と日本人とのこの最初の出会いは、彼の日本所蔵の古籍収集事業の契機となった。その後、数10年にわたり、たえず日本所蔵の古籍に気を配り、清末の日本駐在公使をつとめる間にも、外交活動の傍ら古籍収集の活動をしていた。今日、彼が一生の精力を掛けて集めたコレクションは北京大学図書館に架蔵され、その

うち、日本刊本は1千点を上回って、北京大学図書館所蔵の日本書籍の大半を占めている。

また、陳群<sup>ちんぐん</sup>（1890～1945）も忘れてならない存在である。福建省出身で、明治大学、東洋大学に留学した彼は、孫文の眷顧を受け、大元帥府秘書、中央執行委員会及び国民政府委員聯席會議国民党代表、北伐東路軍全敵総指揮部政治部主任などの職を経て、汪精衛政権の内務部長に上り詰めた。彼は権力を十分駆使し、無我夢中に本の収集に走り、上海と南京に構築した書庫に数十万冊の本をコレクションした。そのうち、日本刊本は1134点<sup>(註2)</sup>にも達して、李盛鐸を凌いでいる。1945年に自害した彼のコレクションは今主に南京図書館や台湾中央図書館などに散らばっている。

蔵書家の他に、商人も大きな役割を果たしたと考えられる。上述した岸田吟香（1833～1905）は、まさにその典型的な例であろう。津山市旭町出身の彼は、幕末からヘボンといっしょに一回目の上海に渡ったことを契機に、その後もよかれあしかれ中国と深い縁を結び、上海に「楽善堂」という店を構え、薬を売ると同時に本をたくさん販売した。彼が経営した書物の中で、中国の科挙試験用の参考書として袖珍本も多くて一時好評を得たようである。<sup>(註3)</sup>

岸田吟香のほかに、三木佐助<sup>みきさすけ</sup>（1852～1926）も好例である。彼の回想録『玉淵叢話』（1901）によると、若い頃、彼は明治後の古籍が二東三文に下落したのを見込んで、神戸に住んでいる華僑麦梅生<sup>ばくばいせい</sup>と一緒に広東省へ輸出して販売していたそうである。この活動は、明治四年（1871）から明治十二年（1879）にかけて、8年間も持続していたため、数え切れない本が中国に流入したと想像に難くない。そのうち、有名な本としては『全唐文』『通志堂経解』（萩藩府学明倫館の蔵書印あり）『正統文献通考』『文苑英華』『説郛』『冊府元龜』『三才図絵』『淵鑑類函』『学津討原』などといった純漢籍もあれば、『資治通鑑』『群書治要』『太平御覧』『武備志』『輟耕録』などの和刻本漢籍も含まれている。また『唐土名勝図絵』『和漢三才図絵』『毛詩品物図考』などの日本人が漢文で書いた著書も少なくなかった。さらに『群書治要』『欽定四経』『外台秘要』『東医宝鑑』『武備志』『詩緝』『医宗金鑑』『四書彙纂』といった版本まで中国に輸出した。

ついでに麦梅生の息子麦少彭は、近代中国の進歩に華僑らしい貢献をした人物であることを付け加える。彼は神戸に華僑の学校一大同学校を創立し、自分の別荘に中国近代の著名な維新人物である康有為や梁啓超を泊めたこともある。<sup>(註4)</sup>

蔵書家の収集と商人の舶来の他に、貿易を通じての輸入は主要な供給源となったと思われる。

日本の書物は江戸時代に長崎貿易を通して中国に入ったものもあるが、量的には明治以降の比ではない。大蔵省関税局編の『大日本外国貿易年表』（東洋書林、1990年復刻）によると、明治十五年（1882）から同二十九年（1896）にかけての15年の間、中国に輸出した本は75万冊ぐらいで、そのうちの前の8年（明治十五年～同二十二年）は毎年4万冊を上回っている。ことに明治十八年（1885）には15万冊にも達して、それが明治二十三年（1890）に入ると3万冊を下回り、次第に下火になり、明治二十九年までほぼ1万冊台の平行線をたどったありさまだった。

そのほかに、戦前日本人が中国大陸に作った図書館の旧蔵書も見すごしてはならないであ

ろう。たとえば、天津日本図書館があるが、これは満鉄図書館より古い、1905年に天津日本人居留民団が大陸に創設した最初の日本図書館である。ここの5万冊ぐらゐの旧蔵書は、幾たびの時代変遷を経てその後天津図書館に受け継がれている。1996年に万博博覧会記念協会の助成を受け、日本文庫として一般にオープンした。そして、5冊の蔵書目録『天津図書館蔵旧版日本文書目』（天津図書館編、4冊、天津社会科学出版社、1996年）と『天津図書館蔵日本刻漢籍書目』（同）を出し、しかも『天津日本図書館館史資料彙編』（同、2冊）も公開された。天津日本図書館の他に、大連図書館（1918年）、東亜攻究会図書館（1919年）、上海日本近代科学図書館（1936年）、北平日本近代科学図書館（同）などもあり、その蔵書の大半も大陸に残っている。たとえば北平日本近代科学図書館の蔵書は1939年現在すでに40万冊に達し、それがほとんど今の中国科学院図書館に架蔵されているそうである。

### 三、日本書籍の分類

さて、多くの日本の書物が中国人に知られ、もしくは流入してきたのにもない、それを整理分類の必要性が自然に現れてきた。管見に入ったかぎり、その最初の試みをしたのは劉喜海（号燕庭、1794～1852）である。清朝の学者として『海東金石苑』（8巻）、『海東金石苑補遺』（6巻）、『海東金石存考』（1巻）<sup>(註5)</sup>などをものにして金石にすこぶる興味を示したほか、外国の本をも好んだ。彼が世に残した『東国書目』<sup>(註6)</sup>はまさにその結晶といえよう。

本書は「朝鮮書目」「日本所刊書」「日本書目」の三つに分かれ、朝鮮と日本の書物に対して分類を行っている。「朝鮮書目」では「高麗所注書」（4種）のあとに、経（2種）・礼（3種）・史（16種）・子（13種）・集（62種）と分けて96種の朝鮮の書物を記載し、「日本所刊書」では、日本で刊行された『群書治要』の提要と『佚存叢書』の細目を詳述している。また、このあとに続く「日本書目」では、307種にのぼる和書を記録し、それを経（2種）・鈔（27種）・談（12種）・式格（10種）・鑑（1種）・鏡（4種）・記（18種）・六帖（4種）・史（1種）・実録（2種）・録（5種）・日録（6種）・和歌集（27種）・千首（1種）・百首（7種）・拾遺（3種）・次第（2種）・子（3種）・集（39種）・家集（12種）・髓脳（2種）・義（6種）・志（1種）・文粹（2種）・詩（3種）・韻（2種）・図（5種）・法（2種）・訣（2種）・譜（2種）・釈（2種）・術数（22種）、という順に32類に分けている。

これを見れば、書名の最後の字に基づいて分類した特徴が見いだせる。たとえば、『連用鈔』『河海鈔』『江談鈔』『十訓鈔』…『少納鈔』を「鈔」類とし、『宇津保談』『平治談』『源氏談』『今昔談』…『太和談』を「談」類に入れ、『古記』『為記』『吉記』『流記』…『世風記』を「記」類に置き、また『風雅和歌集』『詞花和歌集』『壬二和歌集』…『拾玉和歌集』を「和歌集」類、『壺槐集』『草庵集』『続草庵集』『崑玉集』…『節用集』を「集」類に分類されている。32類のうち、「術数」を除いた残りはすべてこのような手法、つまり書名の末尾の字をとって分類名とし分類を行っている。

これは合理的な分類法だとは到底言えそうもないが、<sup>(註7)</sup>生粋な和書に接した際の清人の困

惑——従来の熟知した四庫分類法でカバーできない異質な書物に対してどう分類したらいいのか——を如実に表していると思われる。私たちは今日の基準でこれを云々と評判するより、鎖国時代にもかかわらず、他の知識人と異にして海外の文物に深い関心を寄せた彼の努力に対して賛辞をおくるべきであろう。

日本の書物に対して本格的な分類を行ったのは<sup>ふうんりゅう</sup>傅雲龍（1840～1900）である。1887年に行われた最初の遊歴官選抜試験でトップの成績で合格した彼は、2年がかりで日本および南北アメリカ諸国（アメリカ・カナダ・キューバ・ペルー）を歴訪し、各国考察の報告書をもっているが、そのうち、日本を考察した記録としては『遊歴日本図経』（30巻、1889年刊）が存する。彼はこの著書において「日本芸文志」を2巻（巻21、巻22）設置し、中国本土に散逸したと思われる本40種余を記述したほか、「日本人著述」として2080種の刊本・写本を経史子集の四庫法に分類して取り上げている。そのうち、経部375種、史部458種、子部821種、集部426種に上っているが、各種の書名の下に著者名と版本を略記し、また、簡単な提要を行った図書もある。例えば、「周易古義一卷、伊藤維楨、写本、日本訓詁学、始於維楨、故私諡古学、称仁齋先生」などがその好例である。さらに、経史子集各部類の書目の末尾でコメントを行っている。たとえば、

右は史類。日本の神代史籍は荒誕で信じがたいものがほとんどである。その正史は源光圀の『日本史』を代表とし、頼襄の『日本政記』などはそのうちの優れたものである。近日、重野安繹などが編集した『年輿紀略』が完成した話を聞いているが未見である。（史部の本は）他にも多いが、要を著わしたのみである。

と神代に関する史書は当てにならないと言い、源（徳川）光圀の『(大)日本史』や頼襄（山陽）の『日本政記』を好評し、<sup>しげのやすつぐ</sup>重野安繹の『年輿紀略』に期待感を寄せている。

しかし、『遊歴日本図経』は四部の一次分類に止まり、その下に二次分類をしていないゆえ、数百種の書目を同じ部類に秩序よく排列することができたとはいえない。したがって、粗雑なイメージを私たちは払拭できなかった。とはいえ、清末に誕生したおびただしい日本視察記の中で、和書記述が早く行われ、それに豊富である点においては、『遊歴日本図経』の右に出るものはなからう。とりわけ、あまり中国人に顧みることのなかった日本の戯曲・和歌といった純和書についても多数列したのは、画期的なことで、『日本一鑑』よりさらに進み、中華中心主義、漢文中心主義を離脱し、日本文化を理解しようとする姿勢がみられ、高く評価すべきであろう。

ほぼ同じ時期に、初代日本駐在公使館の書記官として来日した<sup>こうじゅんけん</sup>黄遵憲（1848～1905）も同様な努力をはらっている。彼は1895年に刊行された名高い『日本国志』の「學術史」で、傅雲龍と同じく四庫分類法を用いて日本の図書に対する分類を試みたが、著者項と版本項をほとんど記載せず、書名、しかも経部の書名のみ（393点）の収録に止まっているため、この内容においては傅雲龍にそん色を感じたといわざるをえない。

傅雲龍や黄遵憲のように、四庫分類法を用いて漢文を中心にした図書に対する分類法は、

まだなんとか間に合ったとすれば、日本語で書かれた本、西洋の近代学問を反映した洋書に対しては必ずしも有効ではなかった。康有為<sup>こうゆうい</sup>（1858～1927）は逸速くそれに気づき、欧米の新しい図書分類法を中国に導入し生かした。彼は中国の変革のために参考とすべき図書を提供するため、1897年に『日本書目志』という15巻にもものぼる分厚い本を著した。これはもっぱら日本の図書を7千点くらい収録した、中国人による最初の目録専門書である。従来の漢文書偏りがちの文人と異にして、日本語で書かれた「新学」内容の本を多数記載し、それを生理、理学、宗教、図史、政治、法律、農業、工業、商業、教育、文学、文字言語、美術、小説、兵書と15の門に分け、各門の下にさらに詳細な類を設けている。たとえば、宗教門の下分類として、宗教総記、仏教歴史、佛書、神道書、雑教を掲げ、生理門と法律門の下に、おのおの36、30の小類を設けている。そして、書名、著者の他に、従来の目録書の盲点となった冊数、価格（とくに価格）なども詳載し、さらにたくさんの類の後にコメントも行っている。これを通じて康の編目発想ならびに政治見解をかいまみることができる。

このように『日本書目志』は、分量、分類法、記載法などの点において独創が見られ、中国の図書分類法が近代化を目指して変貌していく過程の中で大きな比重を占めている本として注目されている。

『日本書目志』と同時に、康有為の門下生である梁啓超<sup>りょうけいちょう</sup>（1873～1929）も、『時務報』と『湘学報』に次々と『西学書目表』（1896）、『書目提要』（1897）を発表し、西洋の図書分類法を力唱した。そして、1902年に『新民叢報』の第9、11号に『東籍月旦』<sup>げったん</sup>（月旦、批評の意）を連載し、初心者向きの日本の書目を紹介した。これは日本の中学校の普通科目のカリキュラムによるもので、倫理、歴史、地理、数学、博物、物理と化学、法制、経済などと分類して逐一詳細に紹介する計画があったが、倫理（31種）と歴史（50種）の部分しか完成を見せなかった。『東籍月旦』は著者、冊数、価格の記載においては、『日本書目志』と類似性が見られるが、各本に対する詳細な解題と批評を行ったのは、同時代の書誌学の本に類例のあまり見られなかった特色を有し、これを通じて梁啓超をはじめとした当時の中国人の、『東籍月旦』に記載された和書に対する認識の一端を知ることができる。この意味において、未完成品で、収録書目も必ずしも多くなかった『東籍月旦』ではあるが、歴史的と現実的な意味を備えた目録だといえよう。

とにかく、近代以降の中国では伝統的な四庫分類法と西洋の新しい分類法に基づいて日本関係の図書の分類を実践してきた。そしてこの二通りの分類法は、『東北地方文献聯合目録・第二輯日文図書部分』<sup>(注8)</sup>『澤存書庫書目』<sup>(注9)</sup>『北京大学図書館蔵李氏書目』<sup>(注10)</sup>などにも見られたように、なお根強く生きて交互に生かされている。

#### 四、図書館の視察

和書が中国に入り、分類が試みられたと同時に、日本の図書館に対する考察も展開された。日本の図書館に関する記述の古い例は、明朝の鄭舜功の『日本一鑑』<sup>(注11)</sup>に溯ることができるが、図書館に足を入れたのは数百年のあとを待たなければならなかった。1904年に全国の改

革の先端を歩んでいた湖南省では、中国早期の近代的な図書館が創設されたものの、経験や資金不足により大きな進展を見せなかった。そこで、1905年に湖南省巡撫（知事）端方が赴任すると、黄嗣艾こうしがいを日本へ図書館の視察に派遣した。日清戦争以降、日本に近代化の規範を求めようと、日本の教育、軍事、法政、実業などに対する考察は盛んに行われたが、専門的に図書館を視察したのはこれが最初だと思われる。近代的な図書館の成立は、日本より遙かに遅れをとったからである。黄は、湖南図書館のため日本で図書をたくさん購入し、そして帝国図書館（今の国会図書館）、大橋図書館、早稲田大学図書館などを視察し、図書館に関する諸制度、財政事情、図書分類法、沿革変遷などの資料を幅広く収集した。帰国後、彼はこれらの資料を『日本図書館調査叢記』（1巻）にまとめあげ、末尾に建言書を附して提出した。建言書では日本の図書館の方針、図書の購入、予算の確保、図書館の構図、雇用制度・給料、図書利用事情、貸し出し、読者接待、書庫ならびに図書館付属施設など10項目にわたって紹介したうえ、湖南省図書館の運営と管理に関する提言をした。<sup>(注12)</sup>

近代図書館の成立過程において、中国は日本から多数の図書を購入し、<sup>(注13)</sup> 図書館の重要な供給源とした。黄の図書館視察は、そのみならず、日本の図書館制度も中国に導入され参考になったことを物語っている。そして、近代図書館の成立と発展は、図書の充実ならびに中国の文明開化に有力なサポートとなったと思われる。

## 余 録

以上は日本書籍をめぐり、時間の流れに沿って中国の歴史文献に現われた日本書籍の記録、中国への流入、それに対する分類、そして図書館の視察について概観してみた。次にこれを補うものとして中国伝存の日本書籍の位置づけについて私見を述べたい。

『中国館蔵和刻本漢籍書目』と『中国館蔵日人漢文書目』は、それぞれ500ページ以上にのぼる目録のため、一見中国伝存の漢文図書が豊富に見えるが、実際はおおむね北京、上海、遼寧、大連、南京といった大きな図書館に集中して、多数の図書館にとってはこれは縁の薄い存在である。これは漢籍が多くの図書館に所蔵されている日本の図書館とはきわめて対照的なことである。筆者はかつて浙江省にある義烏図書館、寧波図書館そして紹興図書館で実地調査を行ったことがある。この三つの図書館は、いずれも四大公共図書館の一つと言われる浙江省図書館に次いで、浙江省における古籍の蔵書の多い市立図書館である。しかし、どちらも日本の漢文図書は10数点ないし20数点しか伝存していない現状である。これは中国の多数の図書館の現状を反映したものと同時に、これらの図書館の過去の歴史も如実に表しているものと思われる。

たとえば、紹興図書館の前身である古越蔵書楼は、1903年に個人の出資により一般庶民にオープンした、中国近代図書館史の中で大きな地位を占めた公共図書館である。翌1904年に刊行された蔵書目録『古越蔵書楼目録』を繙いてみたら、意外に日本刊の漢文書籍が少なかった（19点のみ）。そのかわり、日本語の図書や日本語から中国語に訳された翻訳書は非常に多くて、330点にもものぼっている。

このことからでも、蔵書家と異にして普通の図書館の収集重点は和書（ここに翻訳書も含めた近代の学問を著述した日本の書物を指す。以下同）に据えられていたと見てよいであろう。列強による侵略の歴史を繰り返させられた近代中国では、植民地の危機から祖国を救い出すのは焦眉の急務で、そこで、おおむね伝統文化を研究した漢文図書より、近代科学技術などを反映した和文図書や翻訳書が好まれ、収集の対象となったのはごく自然の選択であろう。

実は中国の図書館は、さらに洋書より和書を重要視した時代があったこともいえる。民国時代の教育部は、1916年に全国の図書館を対象に所蔵図書に関する調査を行った。23の図書館のデータが記録されているうち、和書と英文図書のデータがはっきりとわかる図書館は三つある。つまり直隸図書館は東文1,700種、西文450種で、保定図書館は東文200種、西文10種で、奉天図書館は全12,102部のうち、東文は2割、英文は1割を占めている、という。<sup>(註14)</sup> 東文図書は数倍（直隸・奉天）ないし数十倍（保定）に西文図書を凌いでいることが一目瞭然であろう。このような東文書優位の状況はいつまで保持していたかについてはつまびらかではないが、要するに近代図書館が発足した段階では、中国国内外の政治状況などを十分反映して、訳書や外国の本とくに日本からの新書が、中国の図書館の主な収集対象とされていたことを物語っている。

中国の図書館は漢文図書より和書を好んでいたと説明したが、逆にいえば、日本の漢文書籍に対する収集は、上述した李盛鐸や陳群の例に見られたように、主に近代以来の少数の蔵書家による個人の行為にすぎなかったことといえよう。だとすれば、彼らは日本畑の学者ではなく、あくまでも中国古籍の蔵書家であるため、中国原版の漢籍を第一位に収集し、その不備・不足を補うべく、その次に和刻本漢籍の収集に乗り出し、日本人による漢文著書についてはさらに次の位置に置いていたのも別に不思議なことではない。

そこで、彼らが行った収集活動に対してより客観的に分析する必要があると思われる。つまり、彼らの収集活動のモチーフについては、中日文化財を保護するという明確な政治的な自覚からというよりは、個人の趣味に由来した要素が大きく、商業利益の追求に駆りたてられた場合もある、とみたほうがより歴史事実に近いかと思われる。もっとも、彼らがはらった多大な努力によって多くの中日の文化財を保護し、後人に計り知れない恩恵を与えたことに対しては、最大の賛辞を送りたいのである。

そして、彼らの漢文書籍のコレクションについては、大きな意味はあるものの、和文書や日本語からの翻訳書のように近代中国へ広範な社会的影響を及ぼすことに至らず、主に書誌学・文化保護の域に止まっていたことであろう。

とにかく、彼らの収集活動については動機と結果、漢文書籍と和書とを見分けた上、等身大に見直したいものである。

図書の記載から分類へと、図書そのものに対する関心から図書館制度への重要視、中国がたどってきたこの道程は、実に長い年月をかけて血の教訓を伴ったいばらの道であった。漢籍が日本の文明進展に多大な影響を及ぼしたことは、いまさら饒舌するまでもないが、日本所蔵の漢籍が中国本土の不備を補填し、近代文明を記した和書が中国の近代化へのテンポを

速めたのも、また争うことのできない史実であろう。地理的に近いことは、このようにいやおうなしに中日両国が緊密に交渉せざるをえない宿命を決定し、その中で計り知れない役割を果たしたのは、他でもなくこの「本」であろう。中日両国の地縁より結ばれた書縁には実に玩味すべきものが多々ある。

附記：これは2001年2月22日に国際日本文化研究センター主催の第17回国際研究集会で講演した原稿に加筆し、まとめあげたものである。また、同原稿はすでに王勇・大久保秀夫編『奈良・平安期の日中文化交流—ブクロードの視点から—』（農文協、2001年9月）に発表されている。

#### 注

1. 『吾妻鏡補』については、拙論「吾妻鏡補について」を参照されたい。「吾妻鏡補—中国人による最初の日本通史」所収、朋友書店、1997年。
2. 陳群の蔵書目録『澤存書庫書目』による。同初編に日本刊本289点、同次編（二編）に845点を収録。
3. 岸田吟香については、拙論「一百多年前一個日本人の上海手記—岸田吟香の『吳淞日記』」（『中国江南：尋繹日本文化的源流』、当代中国出版社、1996年）と「岸田吟香出版物考」（『中日文化論叢—1997』、杭州大学出版社、1999年）を参照されたい。
4. 湯志鈞『乘桴新獲—從戊戌到辛亥』頁588、頁627。江蘇古籍出版社、1990年。
5. 『海東金石存考』については、劉喜海の著書と思われがちであるが、朝鮮人趙雲石の撰であった。藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』、国書刊行会、1975年。
6. 邵懿辰撰、邵章統録『増訂四庫簡明目錄標注』（付録三）に所収、上海古籍出版社、1959年初版、1979年新版。
7. 『東国書目』所載の図書は分類と記載上において問題点が多数含まれている。今後のさらなる研究を必要とするであろう。
8. 『東北地方文献聯合目録・第二輯日本文書部分』は中国図書分類法（十進法）によるものである。大連市図書館主編、1984年。
9. 『澤存書庫書目』は四部分類法に基づくものである。南京図書館編、1930年代。
10. 『北京大学図書館蔵李氏書目』は四部分類法に基づくものである。そのうち、日本刊本は1176種記載。正確な編纂年は不詳。
11. 『日本一鑑・窮河話海』巻四に、下野（足利）文庫と金沢文庫についての記述がみられる。
12. 『日本図書館調査叢記』による。1905年湖南学務処印刷、東京都立図書館実藤文庫蔵。
13. たとえば、盛宣懷（1844～1916）は、病氣治療のため日本滞在中に東京、京都で多数の図書を買ひ、それはその後上海に創建された愚齋図書館の基礎造りをした（『愚齋東遊日記』）などの例がみられる。
14. 『教育公報』第三年第十期、『中国古代蔵書与近代図書館史料』所収、中華書局、1982年。この調査報告書には、黒竜江、山東、河南、福建、廣東、廣西、雲南、貴州などの図書館のデータも収録されているが、訳書と外国書という言い方で表現されているため、東文書の具体的な数字がわからない遺憾が残っている。